

中北.com

地域教育情報紙

中北教育事務所
地域教育支援スタッフ

no
2

TEL 0551-23-3046

FAX 0551-23-3013

チュウホクドットコム

中北の地域社会 (COMmunity)の心の交流 (COMmunication)をめざします

峡中地区・峡北地区 地域教育推進連絡協議会

第1回峡中・峡北地区地域教育推進連絡協議会が、6月23日(火)に北巨摩合同庁舎で開催されました。多くの会員が集まり、全体会、全体研修会、協議会及び情報交換会が行われました。



【新役員左から：矢巻・坂本・石原・佐野 氏】

協議会において、各地区の本年度役員が次のように決定しました。

峡中地区

- 会長 佐野 勝彦 氏
(昭和町教育委員会教育長)
- 副会長 牛奥 久代 氏
(甲府市女性団体連絡協議会会長)
- 石原 初江 氏
(甲府市小中学校PTA連合会会長)

峡北地区

- 会長 坂本 宗子 氏
(北杜市教育委員会教育委員長)
- 副会長 矢巻 令一 氏
(韮崎市教育委員会教育長)
- 小澤 俊孝 氏
(北杜市保育所連合会会長)

研修会：子どもの貧困の現状

社会活動家・法政大学教授 湯浅 誠 氏

1 子どもの貧困の現状

- ・日本で「貧困（平均所得の1/2を下回る家庭）」の子どもに分類されるのは、16.3%（1/6または350万人）である。
- ・所得は母子2人家庭で年収140万円未満、4人家庭で年収200万円未満である。
- ・一般に持たれている「貧困」のイメージ（途上国の難民キャンプや戦後すぐの日本）に比べると裕福に映る。しかし、「ご飯食べてる」「靴履いてる」「学校行っている」「じゃあ、たいしたことないじゃん。」ではない。毎日の生活の中で、雑誌を買ったり、友達と遊びに行ったりをあきらめなければならないことが問題なのである。

2 子どもの貧困の問題点

- ・日常的にあきらめられることを強いられて成長する子どもたちは、夢を持てなくなるのである。

夢を持たない子どもは、将来活力のある社会を作れない。

・金銭的な面であきらめなければならないことを、たくさん体験して子どもたちが育ってゆく。小さな「あきらめ」の積み重ねによって、「どうせ自分なんか...。」と考えてしまう、自己肯定感の持てない人間ができてしまうのである。

少子化により子どもが減っている日本社会では、減った分を補うだけのがんばりを持つ子



どもが増えていかないといけないのに、逆行している。30年後、我々が老人になったときに、日本を支えるのは、今の子どもたちである。現在、その子どもたちの6人に1人が毎日何かをあきらめている。

3 教育の立場からできること

1)現代教育の課題・グローバル人材の育成

これから求められているのは「異自言」（いじげん）人である。自分と立場の違う人と関わる力、それとの対比で自分を認識できる力、それを言語化できる力を持つ人間のことである。この力をどうつけるかが、現代教育の課題であるが、いわゆるグローバル人材である。

多様な価値観を身につけるためには、多様な人間の集まる環境に身を置くのが近道である。

2)現在の学校現場の問題点

「貧困状態にある」ということがわかると、子どもたちは排除されてしまう。そこで、いじめを誘発しないように学校現場では、あたかも「貧困」が存在しないように扱ってきた。学校は子どもたちの社会が分断されることを恐れ、多様性を避けてきたのである。

3)学校ですべきこと

子どもたちの創造性は、自分と異質なものが、身近にいることによって作り出されるのだから、学校の枠の中で、生徒一人一人の多様性をさらしながら、かつ、いじめに至らないようにしてやる必要がある。子どもたちはそれに耐えられる力を持っているはずである。「学校が」するではなく、「学校で」する。教師がするのは場の提供である。

4 結局は私たち大人の問題に帰ってくる

子どもたちに、異自言の力を身につけさせるためには、私たち大人がその力を持っていなければならない。学校に若者を支援するNPOが入ったとき、先生方の間でアレルギー反応が起きた。「そんな訳のわからんものにかき回されてはたまらない。」と言っていた。異質なものを拒絶する教師に、異質なものを認める生徒が育てられるとは思えない。結局、教師自身の異なるものと係わる能力が問われるのである。

子どもの貧困の話をする、どうしても教員を含む大人の異自言観の話になってしまう。大人が、多様性を認める姿を子どもたちに示してやるのが、子どもたちのグローバル人材の育成に繋がることをかみしめて欲しい。

対談 フードバンク山梨

理事長 米山けい子氏

講演の後半では、フードバンク山梨の米山けい子理事長との対談が行われました。特にこの夏に行われる「フードバンク子ども支援プロジェクト」についての紹介がなされました。

こども支援プロジェクトの概要

1. 目的

フードバンク山梨が食糧支援をしていた子どものいる世帯を調査した結果、76%は、1人1食120円未満の食費で生活をしていました。学校が夏休みとなり、給食を食べることができない8月は、十分

な食事や栄養がとれず、痩せてしまうなどの事例もあり、特に

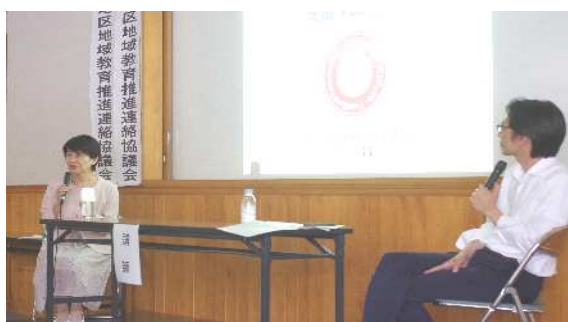
重点的な支援が必要となります。そのため、全国初の試みとして、8月の毎週、子どものいる貧困世帯に向けて集中的に食品を配送し、子ども達の健全な成長を助けることを目的とします。

2. プロジェクトにより期待できる効果

- 1.食糧支援によって、困窮世帯の子どもの欠食を補完できます。
- 2.困窮世帯の食費を抑制、経済的負担を軽減できます。
- 3.浮いた食費を保険料やライフラインの滞納分に充てる、文房具や生活必需品を購入するなど、生活環境の安定や改善ができます。生活基盤を整えることで、自立支援につながります。
- 4.食品と共に手書きの手紙をお届けし、貧困世帯の社会的孤立を防ぐことができます。

[連絡先]

〒400 - 0306 南アルプス市小笠原3 1 7
サンシャインビル1F
TEL/FAX 0 5 5 - 2 8 2 - 8 7 9 8
Eメール info@fbyama.com



平成27年度 山梨ことぶき勸学院 入学式

4月14日にことぶき勸学院入学式が甲府市のコナー文化ホール（県民文化ホール）にて行われました。168名の2年生に迎えられ、本年度は県内全体で194名が入学しました。式では阿部邦彦学院長（教育長）より、「『生きがいの創出』『新たな縁・絆の構築』『地域

の活性化に貢献できる人材になること』

『健康増進』の4つを目標とし、生き生きとした日々を送ってほしい。」と式辞

をいただき、新入生は、それぞれ2年間の学習に向けて、志を新たにしました。



講演会

「笑い与健康」

医師・日本笑い学会講師 松本 光正 氏

今の予防医学は、(病院へ)「呼ぼう医学」になっている。健康が1番、命は2番と考えると、無駄なお金を使わなくて済む。キーワードは、

「笑うこと」

心が川上であって、身体が川下にある。だから心が健康で無ければいけない。笑うことによってプラス思考を手に入れることができますよ。

「加齢変化を受け入れる」

年齢には勝てないのは当たり前、そこを受け入れないと苦しいですよ。年をとれば、老眼になるのは当たり前だと受け入れられるのに、なぜ、高血圧やコレステロール値を受け入れられないのですか？高血圧も、栄養状態が改善されて血管が丈夫になってきているから、恐ろしいものではなくなってきているんですよ。

「自然治癒力を信じる」

細菌を殺すために熱が出るように、身体がやっていることは全て意味があるはず。

「知らぬが仏」

健康診断に行ったら調べるから、心配事が増えるんです。

「それは本当に科学的ですか？」

世界中で、このサプリを飲んだら健康で長生きできると証明されているものは1つも無いんですよ。ステイブジョブズだって、どんなに大金を持っていても、死ぬときは死ぬんだから、無駄なサプリにお金をかける必要はないんじゃないですか？

身体と心は、心が川上で身体を支配している。

『病は気から』の言葉どおり「風邪ひいたらどうしよう」、「医者へ行こう」、「薬を飲もう」と思うマイナス思考が病気を呼んでいるんです。

だから、プラス思考になって1日に100回笑うことを実践しなさい。調査では、4歳の子供は1日に300回笑うのに、70歳になると3回しか笑わないそうです。朝、自分の布団の中で目が覚めたら嬉しくて笑いなさい。(日本では、160万人の人は病院のベッドで目覚めるんです。)トイレに行っておしっこが出たら感謝して笑いなさい。(31万人はおしっこが出ないで苦しんでいるんです。)

感動・感謝・感激の3感王をめざし、生きていることを当たり前と思わずに暮らしなさい。

『目が覚めて今朝も嬉しや今日もまた

この世の人とあると思えば』

これが良いと科学で証明された食べ物は1つもありません。自分で信じたものを良く噛んでゆっくりたべてください。そうすれば、1万年は生きられる。ただ、重要なのは体重を落とすこと。食べなきゃ痩せるから大丈夫です。勇気を持って暮らし、しっかりと医療費を節約して、その分で高い旅行に行ったら人生を楽しんでください。



平成27年度 北杜市ふるさと民俗塾～孫に語り伝える地域のくらし～

北杜市郷土資料館では「ふるさと民俗塾～孫に語り伝える地域のくらし～」と題して年間8回(2年間で16回)の講座を開催しています。6月10日(水)に第1回講座が開かれました。講座では小淵沢町の高福寺住職水原康道老師を講師に迎え、「結界(境界)について」の講義が行われました。

家や寺社の物理的境界や、結婚式や葬儀、ムラ社会の心理的障壁といったものも「結界」の概念を理解することによって、ひもといてゆくことができるとのことでした。「結界」はお互いにそれを守ろうとすることで成立する約束事であり、維持するためには人々の強い意志と努力を必要とするものである。現代において結婚式や葬式の簡略

化が進むのは、守ろうという意思が希薄になっているからであるとのことでした。

会場からは「結界の崩壊は日本文化の進化の形のひとつとして捉えてよいものか？」など非常に深い質問がされていました。

なお、本講座の本年度分は受付を終了しているとのことでした。



社会教育指導者研修会

「地域に根づいた分館祭り」(南アルプス市櫛形中央公民館 豊地区分館)

6月24日(水)山梨市民会館を会場に社会教育指導者研修会(県教委主催)第2回研修会が開かれました。この日は県内のユニークな公民館活動の発表から各地区の公民館も学ぼうと、県下公民館関係のみなさんが200名ほど集まりました。

たつひと

中込龍人分館長は、豊地域の歴史や文化を背景に、地域の活動を支え、交流の場として活力ある公民館活動の事例を報告しました。



毎年2月に開催される「豊地区分館まつり」は公民館活動の中心で、地域の女性の約7割、男性の3割が参加するものです。昨年は470名

の参加で、保育園児からお年寄りまで三世代が一同につどい、互いの活動を発表や展示を通し、交流を深めています。発表部門では、園児のピアノ、各同好会のフラダンス、オカリナ、大正琴、吹奏楽、フォークダンス、二地区の太鼓保存会、生き生きクラブの歌と演奏など、広い世代が様々な発表をします。また、地域の伝統工芸「切子」の保存会では、その実演と実習を行います。展示部門では、地域のかつての主幹産業養蚕を小学生が学び、繭からコサージュをこしらえた作品展示や、伝統工芸「切子」の展示、各同好会の写真、書道、絵画などの展示もあります。特にユニークなのは食生活改善推進委員会で昼食やおやつを振る舞うところで、それを楽しみに訪れる方もいるようです。分館のスペースを最大限に活かし、日頃の各活動が皆さんに伝わる工夫がなされていました。男性の参加者増をめざし、更に地域に根づいた分館祭りを充実させたいと、中込分館長さんは報告をしました。

峡中地区・峡北地区 地域教育推進連絡協議会

地域教育フォーラムを開催します

期日：平成27年10月28日(水)14:00～16:30

会場：日本航空学園 J-shipホール

講演：「防災教育

- 家庭・学校・地域で取り組むこと -

山梨大学地域防災マネジメント研究センター
准教授 秦 康 範 氏

平成27年度 『中北.com』 2

編集・発行 中北教育事務所 地域教育支援担当
飯田 野 崎

〒407-0024 韮崎市本町4-2-4

電話 0551-23-3046

Fax 0551-23-3013

中北教育事務所のホームページでもご覧いただけます。

<http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-ch/index.html>